

意識と経験: デカルトにおける知られざる二つの概念

田村歩(茨城工業高等専門学校)

デカルトは、コギト論や自由意志論という自身の形而上学の根幹をなす議論において「経験」を多用している。しかし、「経験」のデカルト的用法は当時の第三者にとっては異質であったようだ。『省察』および『哲学原理』の仏訳者たちは、以下に示すように、ラテン語原典における「経験[する]」という語を全く異なる語に置換しているのである(Lはラテン語原典を、Fはフランス語訳を意味する)。

L 「[私が自身を継続的に存在させる力をもっているとするれば]疑いなく私はそれを意識していることであろう。しかし私は何らそのような力があることを経験することはない」(Med., AT-VII, 49)

F 「[私が自身を継続的に存在させる力をもっているとするれば]私は少なくともそれを思惟し、また認識していなければならぬだろう。しかし私は自身のうちでそれについて何をも感じることはない」(AT-IX-1, 39)

L 「自身のうちで、自身が存在するのでない限り思惟することはありえないと経験する」(2ae Resp., AT-VII, 140)

F 「自身のうちで、自身が存在するのでない限り思惟することはありえないと感得する」(AT-IX-1, 110-111)

L 「私たちが自身のうちで経験するすべての思惟の様態は、二つの一般的なそれに帰着される」(P.Ph., AT-VIII, 17)

F 「私たちが自身のうちで気づくすべての思惟の様態は、二つの一般的なそれに帰着される」(AT-IX-2, 39)

L 「このような自由が私たちのうちにあることを経験した」(P.Ph., AT-VIII, 20)

F 「私たちは極めて大きな自由を自身のうちで知得した」(AT-IX-2, 41)

第三者によるこれらの変更は、「経験」のデカルト的用法が当時の一般的な用法とは異なっていたことを示唆している。それでは、デカルト的経験概念とはいったい何であるのか。デカルト哲学の長い研究史において、この問題を主題的に扱ったものは少ない。Clarke による語彙論的調査に基づく基礎的研究が 1976 年に行われたが、それ以降は、自然学における経験、すなわち「実験」に焦点を当てた研究が大半である(この点は、『ケンブリッジ版デカルト語彙集』(2016 年)において、「実験[experiment]」の項はあるが「経験[experience]」の項はないことから窺われる)。しかし幸運なことに、デカルト自身がヒントを残してくれている。重要なテキストを引用しよう。

「私は思惟する事物にほかならないのであるから[...]、何かそのような[現にあるところの私が少し後にもまたある、という事

態を設えうるための]力が私のうちにあるとしたならば、それを疑いもなく私は意識していることであろうから。しかし、何らそのような力があることを私は経験することはないのであって、まさしくこのことからいとも明証的に私は、私が自らとは別の存在に依拠しているということを確認する」(Med., AT-VII, 49)

「私たちはこれ(=自由すなわち非決定)を、それ以上に明証的かつ完全に把握されるものがないほどにはっきりと意識する。というのも、その本性上私たちには完全に把握できないことが解っていることを私たちが把握しないからという理由で、私たちが内的に把握し、自らのうちで経験する他のことをも疑うとすれば、それは不合理であろうから」(P.Ph., AT-VIII, 54)

「精神はこのこと(=心身の合一)をたしかに意識しています。実際、そうでなければ、精神は自らの意志を、四肢を動かすべく傾けなかったことでしょう。ところで、非物体的である精神が物体を動かすことができるという点ですが、いかなる推論も他の事柄から引き出された比較も、このことを私たちに示してはいけません。しかし、極めて確実かつ極めて明証的な経験が、このことを毎日私たちに示しているのです」(À Arnauld [29 juillet 1648], AT-V, 222)

これらの引用から解るように、デカルトは「経験」を「意識」と対応させて使用しているのであり、両者のあいだに何かしらの関係性があることが示唆されている。各箇所における「経験」および「意識」は同一の対象(=「現にあるところの私が少し後にもまたある、という事態を設えうるための力」・「思惟」ないし「懐疑」・「自由すなわち非決定」・「心身の合一」)をもっているし、経験か意識かという語の差異以外の、文意に係る差異は一見認められない。したがって、「意識」という概念を切り口として「経験」概念を究明することができるように思われる。

しかし、ここで問題が生じる。デカルトにおいて「意識」が何であるのかは、「経験」が何であるのかと同じくらいに不明であるからだ。この語が明確に「意識」という認識論的ないし心理学的な意味をもつようになるのは、厳密にはデカルト以降のことであり、マルブランシュやピエール＝シルヴァン・レジスらデカルト主義者たちを俟たねばならない。Davies が指摘するように、当時の仏訳者クレルスリエはデカルトの〈conscientia〉の訳出に際し、〈conscience〉と訳したうえでこれに「認識[connaissance]」という語を独自に追加するか、あるいは当該語そのものを削除しており、翻訳の困難が伺われる。つまりデカルトは、[少なくとも私たちににとって]不明瞭な概念を不明瞭な概念によって補っているのである。しかし、新たな概念とは突如として生まれるのではなく徐々に生まれてくるものであるとするならば、本稿が引用した諸テキストの中で意識概念がまさに精練されつつあると言えるだろう。これらの点を踏まえて本発表は、「意識」という語が心理学的な意識として確立されるにはデカルト主義者たちを俟たなければならぬとしても、デカルトは「意識」と「経験」という二つの作用を相互補完的に用いることで、心理学的な意識を表そうとしていたと解釈する。